

外国語活動

主体的に他者と関わり、その中に楽しさや喜びを見出せる子ども
～「やりたい!」「できた!」の繰り返しを通して主体性を育む外国語活動の授業づくり～

砂田 渚

1. 外国語活動における未来そうぞう

本校の外国語活動のめざす子ども像とは、「外国語を使って、主体的に他者とコミュニケーションを図り、その中に楽しさや喜びを見出せる子ども」である。

子どもたちは将来、多様な文化を持つ人々と共存していくこととなり、子どもたちにとって、外国語は必要不可欠なものとなっていくであろう。しかし、外国語はコミュニケーションスキルの一つでしかなく、それ以上に「主体的に他者と関わっていく態度」や「違いを理解し、受け入れる力」などの育成が必要であると考え。そこで、本校の外国語活動では、外国語（英語）というツールを通して、友だちや身近な人と関わったり、新しい文化などに出合ったりする中で、自分との違いを知り、互いに理解し合えることに楽しさや喜びを感じられる態度の育成をめざしていく。そして、そうした態度が「もっといろいろな人と話したい!」「関わりたい!」という未知への好奇心や主体性を新たに生み、どんな状況や課題においても、主体的に他者と関わり、その中に楽しさや喜びを見出そうとする子どもたちの姿に繋がっていくものだと考える。

2. 「未来そうぞう」と教科との関係

(1) そうぞう的实践力を発揮する姿

コミュニケーションとは、「知りたい!」「話してみたい!」といった相手への興味や関心、好奇心が生まれることから始まり、互いに関わり合うことで成り立つものである。そうしたコミュニケーションの素地や基礎を養うことをめざす外国語活動は、未来そうぞうにおける「主体的実践力」と「協働的实践力」の育成に適した教科であると考え。

さらに、外国語の特性として、日頃あまり慣れ親しみのない外国語を使用することが挙げられるが、そこには、相手に自分の思いが上手く伝わらない時や、反対に相手の伝えたいことが分からない時など、様々な場面で困難が生じることがある。しかし、そのような時でも、諦めずに相手と関わり続け、様々な表現方法を試していく力が外国語活動には必要であり、こうした外国語活動における主体的な姿は、未来そうぞうにおける「主体的実践力」を発揮している姿と結びつき、より向上させていくことができると考える。

そこで、本年度の外国語活動では、特に「主体的実践力」を高めることを通して、そうぞう的实践力を発揮する姿をめざしていくこととする。

外国語活動における、そうぞう的实践力を発揮している姿を、以下のように捉える。これは6年生の卒業時にめざす姿であり、段階的にめざしていく姿であると考え。

表1 『主体的に他者と関わり、その中に楽しさや喜びを見出せる子ども』

【そうぞう的实践力を発揮している姿】	
課題の解決に向けて、今まで学習した言葉や表現、他者との違いを受け入れる中で得た学びなどを活用して、新たによりよい表現方法を考え、相手とコミュニケーションを図り続けている姿。	
【主体的実践力を発揮している姿】 ・諦めずに課題を解決しようとしている姿。 ・主体的に他者と関わろうとしている姿。	【協働的实践力を発揮している姿】 ・相手の良い表現についてほめたり、必要な時にアドバイスをしたり教え合ったりしている姿。 ・身近な相手や他国の人の考え方や文化について認め合っている姿。

※上記の3つの実践力が「未来をそうぞうする子ども」にとって必要な資質・能力であると考え。

外国語活動は、コミュニケーション活動や、グループでの学び合い活動といった他者との関わりが非常に多く、他者がいてはじめて成り立つものである。加えて、言語を使ったコミュニケーションだけでなく、身近な友だちから世界の様々な人や文化の共通点や相違点を見出し、それらを認め合おうとする力も必要であり、こうした互いに伝え合ったり認め合ったりする力が「協働的实践力」に結びついていくと考える。さらに、外国語活動では、相手に自分の思いや考えを伝えようとした時に、より良い言葉を選択するだけでなく、文字を見せてみたり、身振り手振りを使ってみたりといった、様々な表現方法を考え、工夫していく力も求められる。そして、そうした工夫によって自分の思いや考えが伝わった達成感から、これまで学習してきた言葉や表現方法、さらには、他者との違いから得た学びについて意味や価値を見出し、活用していこうとする力が「そうぞう的实践力」へと結びついていくのである。

外国語活動においては、主体的実践力と協働的实践力は常に往還しており、これら二つの力の向上が、そうぞう的实践力の育成に繋がっていく。そのため教科における外国語活動での主体性の育成は、未来をそうぞうする子どもの育成において重要な役割を担っていると考えられる。

(2)主に、主体的実践力を高め、そうぞう的实践力を発揮できるようにするための手立て

①「主体性」や「必然性」を生む学習の題材や目標の設定

上記にも述べたように、外国語活動は、日頃あまり慣れ親しみのない外国語を使うということが特性として挙げられる。つまり、子どもたちが主体的に課題に向き合い、アプローチし続けるためには、

「やってみよう!」「話してみよう!」という好奇心に加え、そこに英語を使ってコミュニケーションを行う「必然性」の生まれる題材の設定が必要であると考えられる。例としては、本校で年間を通して行っている、外国の子どもたちや留学生といった、主として英語を話す人たちとの交流（交流授業、手紙交換、テレビ電話など）や、異学年間の交流、幼稚園との異校種間交流などがある。こうした交流の場を単元のコミュニケーション活動のねらいに位置付けることで、子どもたちに活動に取り組む「必然性」が生まれるとともに、明確な相手がいることで、諦めずに課題解決に向き合おうとする態度の育成に繋がっていくのではないかと考える。

また、日本にある外国の言葉や文化の発見、自文化と他文化の共通点や相違点などに気づけるような題材や教材を扱うことも、異文化への興味・関心から子どもの主体性を高めることに繋がり、さらには自文化の良さや素晴らしさに改めて気づく機会にもなると考える。

②言語活動とそれを支える言語材料の充実

外国語活動において「言語活動」とは、インタビュー活動やスピーチなどの「互いの考えや思いを伝え合う」活動を意味し、言語材料について理解したり、練習を繰り返したりする「ドリル活動」とは区別して考える。（歌やチャンツ、発音練習など、自分の考えや思いを伝え合う要素がない活動は、言語活動ではなく、ドリル活動にあたる。表1）英語を用いた「言語活動」では、子どもたちは自分のことを知ってもらったり、相手のことを知れたりすることの楽しさや喜びを感じることができ、それが、自分と他者、自文化と他文化等を認め合おうとする態度の育成にも繋がっていく。つまり、言語活動を充実させることで、子どもたちは英語を使ったコミュニケーション自体に意味や価値を見出すことができるのではないかと考える。

しかしながら、言語活動を行うには、ドリル活動による表現の定着や言語材料の蓄積は必要不可欠である。「知っているから、だれかに伝えたいくなる。」のであり、「これならできるかもしれない!」という自信が、子どもの主体的な態度に繋がっていく。とはいえ、ドリル活動は、たとえ魅力のある活動であったとしても、その活動自体の楽しさだけに価値を見出し、英語表現そのものになかなか意味を見出すことができない。そのため外国語活動では、一つの授業内、あるいは一つの単元内に置いて、ドリル活動を適度に設定し、一定の言語材料の蓄積を図りながら、言語活動の充実を軸にした授業や単元計画を組み立てていく必要がある。

表1 言語活動とドリル活動の違い

言語活動例	ドリル活動例
→互いの考えや思いを伝え合う活動	→言語材料について理解したり、練習を繰り返したりする活動
・インタビュー活動	・歌やチャンツ

<ul style="list-style-type: none"> ・ small talk ・ 自分の思いや考えを伝えるスピーチなどの活動 <p style="text-align: right;">など</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ key wordやkey sentenceなどの発音練習 ・ 定着のためのゲーム活動 <p style="text-align: right;">など</p>
--	--

本年度の外国語活動では、以上の①と②の手立てにより、子どもたちの主体的実践力を高めることを主軸に、そうぞうの実践力を発揮している姿をめざしていきたい。

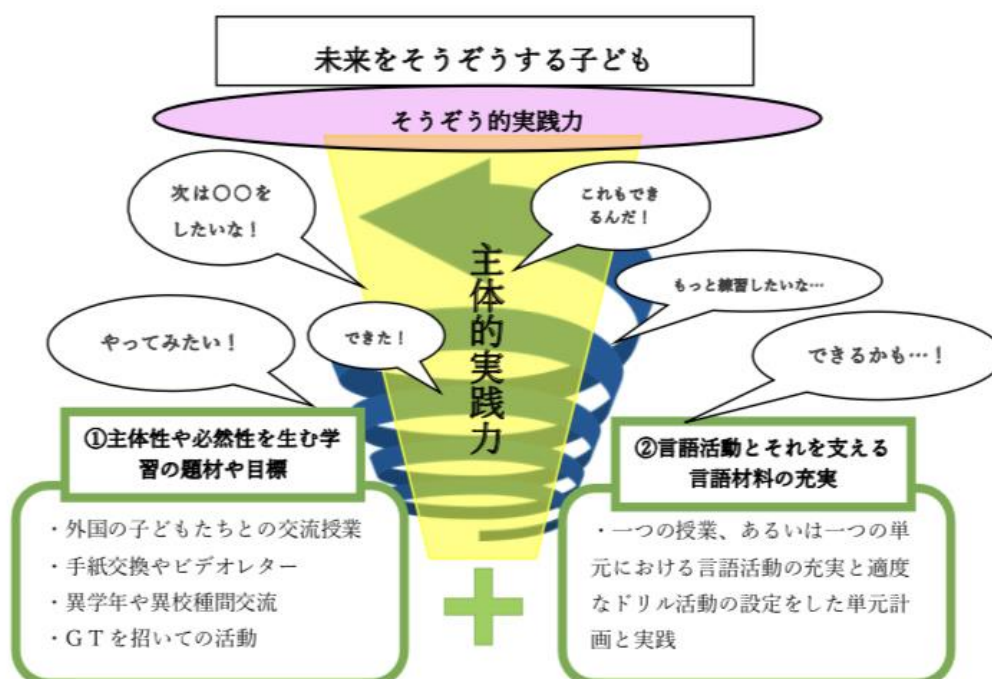


図1 外国語活動からアプローチする主体的実践力の育成と未来をそうぞうする子どものイメージ図

3. 外国語活動における評価について

評価においては、主に「行動の観察」「パフォーマンス課題」「ワークシートや振り返りシート等の記述」によって評価を行う。パフォーマンス課題については、インタビューやスピーチ、プレゼンテーション等の課題を観察するだけでなく、ICTを活用し、デジタルポートフォリオで記録したものからも見取っていくものとする。また、ことばに関する評価を除いては、振り返りシートや記録の共有などを通して、子ども自身による自己評価や子ども同士での相互評価も取り入れていくこととする。